

学生協働の取り組みは学生・職員・教員の間で どのように違って見えているのか — 皇學館大学附属図書館ふみくら倶楽部の4年間を事例として — 岡野 裕行, 井上 真美, 三木 彩花

How Do Perspectives on Student Cooperation Initiatives Differ among Students, Staff, and Faculty?: A Four-Year Case Study of the Library Club (Fumikura Club) at the Kogakkan University Library, by OKANO Hiroyuki, INOUE Mami, and MIKI Ayaka.

1. はじめに

皇學館大学附属図書館では、2016年2月に学生サポーター団体ふみくら倶楽部を設立した。本稿では、学生の立場から三木(4代目部長)が、図書館職員の立場から井上が、教員の立場から岡野が、それぞれふみくら倶楽部にどのように関わり、学生協働をどのように考えてきたのかについて報告する。

なお、第2章は学生である三木の文責によるものだが、これは後輩の立場から先輩学生たちの活動を回想する内容になっている。文体としては本来「だ・である調」で記述すべきところだが、そうすると先輩後輩関係の距離感を適切なニュアンスで表現することが困難になるため、この部分のみ「です・ます調」の回想録となることを予めお断りしておく。

2. 学生視点のふみくら倶楽部(三木)

2.1 ふみくら倶楽部の始まりと先輩たち

ふみくら倶楽部の活動は、私が大学に入学する直前の2016年2月末に始まったと先輩たちから聞いています。活動の中心となっていたのは当時の3年生で、学生生活が残り約1年間という時点で非公式に団体を立ち上げたそうです。その直後の4月に入学した私は、ふみくら倶楽部の設立後に入学した初めてのメンバーであり、学生生活の4年間のすべてを通して活動に関わることができた最初の学生となります(2020年3月卒業予定)。

2016年度の活動は、図書館職員のみならず先輩

たちも含め、関わっていた全員が手探りででした。当時の私は図書館学の勉強を始めたばかりで、学生協働という言葉も知りませんでしたが、先輩たちの後をついていく形で、附属図書館での企画展示のテーマを考えたり、書架整理をしたりしていました。

9月には名古屋での選書ツアーに合わせて金城学院大学と愛知大学の図書館を訪問し、それぞれの大学の学生協働団体と交流しました。発足から早い段階で他大学の先行事例を見たことから得られた学びは大きく、その後の自分たちの活動にも影響を受けました。同じ月、「ウィキペディアタウン伊勢」を実施しました。みんなで伊勢のまちを歩いてまわり、伊勢市立伊勢図書館で資料を確認しながら、ウィキペディアのなかの5項目の記述を更新しました。

10月には地元の古本屋ぼらん／伊勢河崎商人館とともに、「第2回伊勢河崎一箱古本市」の企画運営に携わりました。会場で偶然出会った初対面の人同士が、本を介して楽しそうに言葉を交わしていました。現在、私たちが活動時に身につけている紺色のエプロンも、このときの一箱古本市の開催に間に合うように制作しました。また、学園祭のなかで「伊勢うどんトークライブ」と企画展示を行うなど、地元文化を意識した地域連携活動も行いました。

11月には第18回図書館総合展でポスター発表をするとともに、「第1回全国学生協働サミット」に初代部長の岡野ひかりさんが登壇しました。まだ1年生だった私はこの年にはあいにく参加できませんでしたが、団体を設立してからわずか8か月にもかかわらず、学外へと積極的に飛び出していく活動報告は、会場から大きく注目されたと先輩たちから聞いています。

同じ頃、ふみくら倶楽部の代替り時期を「毎年5月いっぱい4年生から3年生に引き継ぐ」とみん

2019年12月1日受理

(おかの ひろゆき 皇學館大学文学部国文学科准教授)

(いのうえ まみ 皇學館大学附属図書館事務室)

(みき あやか 皇學館大学文学部国文学科4年)

なで決めました。立ち上げに関わった初代部長は、ぎりぎりまで体制を整えたいという思いから、卒業間近の2016年12月までその役を務めてくださいました。それに続く2代目部長の坪井あみさんは、2017年1月から5月までの5か月間その役を務め、後輩たちにつないでくださいました。初代と2代目の部長は、お二人を合わせても約1年3か月という短い期間でしたが、団体設立直後からさまざまなことに取り組んでおり、ふみくら倶楽部の活動の方向性を決定づけてくださったように思います。

2.2 ふみくら倶楽部をどのように発展させるか

2017年6月、3代目部長として中井美月さんに業務が引き継がれ、2年生に進級した私もそのタイミングで副部長になりました。後輩たちも入部してきたことで心強い仲間も新たに増え、みんなで附属図書館の企画展示のアイデアを出しあうなど、図書館内での活動も円滑に進むようになりました。

9月は東海地区で初めて開催された「学生協働フェスタ in 東海」に参加し、他大学の学生協働団体と交流しました。11月には「第2回全国学生協働サミット」に参加するとともに、「第3回伊勢河崎一箱古本市」を開催するなど、学外での活動が続きました。この頃には学内外の活動もスケジュールの見通しが立つようになり、活動サイクルも安定するようになりました。この年は初めての学内協働の取り組みとして、教務担当の職員さんからご意見をいただきながら、附属図書館で単位や履修についての企画展示を展開したことも印象深い思い出です。

2018年6月、いよいよ私が4代目部長になりました。この年の9月には少女まんが館 TAKI1735／多気町立勢和図書館と協働で「ブックピクニック2018」を開催したり、11月に三重県教育委員会／菰野町図書館と連携して子ども司書との「図書館活用プロジェクト」を実施したりするなど、新しいつながりもできました。これらの企画は学外の団体からふみくら倶楽部への協働依頼から始まっており、先輩たちが活動を積み重ねてくださったことで、さらに新しい活動も展開できるようになりました。毎年続けている「第4回伊勢河崎一箱古本市」も10月に開催し、地元の恒例行事として定着したとの評価を市民のみならずからいただくようになりました。

そしてこの年の10月、私は「第3回全国学生協働サミット」のプレゼンの舞台に上がりました。先輩

岡野はか：学生協働の取り組みは学生・職員・教員の間でどのように違って見えているのか

たちから受け継いだことや後輩たちと一緒に取り組んだことなど、ふみくら倶楽部の活動を通して私が経験してきたさまざまな取り組みについて発表してきました。大学図書館での日々の活動を地道に継続すること、図書館職員さんや学内外のさまざまな人たちと協力すること、新しい活動にも積極的に取り組むこと、そして自分たち自身が活動を楽しむことなど、いろいろな思いを抱きながら、部長としてこの1年間を過ごしてきました。

2019年6月、部長の役目を5代目となる岡村真衣さんに引き継ぎ、私は活動の中心から外れました。初代部長が4年生のときに活動をしていたこともあり、ふみくら倶楽部では特に引退というものを定めてはいませんが、先輩たちに胸を張って報告ができるような活動実績を私なりに残せたと思います。ふみくら倶楽部のこれまでの活動は、私自身が成長していく時間でもありました。後輩たちもふみくら倶楽部での活動を通じていろいろなことを経験し、より良い学生協働の形を探ってほしいと願っています。

3. 職員視点のふみくら倶楽部(井上)

3.1 ふみくら倶楽部の活動内容

2015年の第17回図書館総合展に、後にふみくら倶楽部の初代部長となる岡野ひかりさんが聴衆として参加した。当時3年生だった彼女は、他大学の学生協働の取り組みに大きな刺激を受け、自分たちも団体を設立したいとの相談を寄せてきた。その声を受け、図書館で自己実現を目指す学生と、学生と図書館職員の従来型の協働による図書館活性化をイメージしていた図書館職員と、図書館外での活動を視野に入れていた教員の3者が協働し、ふみくら倶楽部の活動を開始した。

ふみくら倶楽部を設立するにあたり、図書館からは、①自立した集団をつくること、②月に一度の書架整理と図書館とのミーティングを行うこと、③長く続くグループをつくること、という3点の要望を学生たちに出した。さらに、学生たちが図書館総合展でポスター発表することを目標に活動することも、学生・図書館職員・教員の間で確認し合った。ポスター発表については、設立初年度の2016年から毎年継続している。活動を安定して続けていく上で、年に1回は体外的な発表を行うということは、自分たちの活動を見つめ直すという点でも、いい機会になっているようだ。

団体の発足から4年目を迎えた2019年度の学年別人数構成は、4年生4人、3年生6人、2年生5人、1年生4人である。既に卒業済みの初期の学生も、1学年につき5人程度が部員として関わっていた。特に部員数の規程を設けてはいないが、ふみくら倶楽部においては、学年ごとに5人前後が程よい人数となっている。

リーダーとなる部長は3年生から選出され、教員・図書館職員と密に連絡を取り合いながら、活動を統括している。部長を補佐するため、3年生・2年生それぞれに副部長を1名ずつ置き、意見の集約や調整を行っている。1年生については、まずは活動に参加して先輩たちの様子を見てもらい、自分が活躍できる場を探ってもらっている。また、4年生は5月いっぱいで一線から退いてしまうが、活動への助言などで組織をサポートする役割を担っている。また、人手が必要となる学外活動などには、都合のつく範囲での参加を呼びかけている。

安定的な活動維持のため、学生・教員・図書館職員が参加するランチミーティング(昼食をとりながらの打合せ)を月に2回必ず実施している。ミーティングでは年度ごとの活動計画を確認したり、直近の活動の打合せや情報共有を行っている。年々活動が活発化しており、今年度は学内活動として企画展示を5回、講演会を2回、講習会などを実施したほか、学外活動としてイベント企画を2回、学生協働交流会への参加を2回、選書ツアーなどを行った。

このように、現在のふみくら倶楽部は、①皇學館大学附属図書館の活性化活動(学内活動)、②学外での図書館や本・読書に関係する地域活性化を目的としたボランティア活動(学外活動)、③皇學館大学附属図書館およびふみくら倶楽部の情報発信(SNS)、という3種類の活動を並行して行っている。それぞれの活動ごとに協働相手となる対象者が変わり、協働相手が変わることによって、教員や図書館職員による支援の形態も変化する。

図書館活性化活動では、ふみくら倶楽部の学生から、企画や展示テーマを随時募っている。たとえば2018年に実施した「これで安心大学生活：ひらけ夢への扉」では、学生からの企画提案をもとに図書館から各部署へ依頼し、教務担当監修による「新入生に履修や単位を学生目線で紹介するポスター」や、各学科協力による「コース紹介ポスター」の展示を行うなど、他部署との協働が始まった。今年度実施

した「点字で展示」も学生からの提案によるもので、これは学外団体(三重県こころの健康センター)や、サポート教員以外の学内の教員による点字講座などは、新たな協働につながる事例となった。一方、学外で行うボランティア活動では、サポート教員が外部団体との仲介や調整の役割を担っている。

以上のように、学生からの企画提案を受け、図書館職員と教員が一緒になって実現化に向けて動いている。また、企画展示の内容を受けて学内の教職員から新たな反応が出てきた場合には、当初の予定にはなかったことも、企画のなかに随時盛り込むようにしている。

3.2 ふみくら倶楽部のつくり方

ふみくら倶楽部の学生にとってサポート教員は、さまざまな人や機関と協働関係を生み出してくれる存在だ。地域貢献や新たな企画で、企業、県や市町の行政組織、公共図書館、出版社、書店など、大学図書館の外にある新しい出会いをコーディネートしている。一方、学生にとって図書館職員は、他部署の職員やほかの教員との学内連携を支援し、活動場所や物品、必要な情報などを提供し、学生がのびのびと活動できる環境づくりを担っている。図書館職員はこれら環境整備以外にも、学生がいつでも相談にのれる役割を担っている。大学図書館の職員は、みんなが学生たちの「何かやってみたい」という気持ちを後押しできる存在でありたいと考えている。

以上のように、学外活動をサポート教員が、学内活動を図書館職員が支援するためには、サポート教員と図書館職員も協働しなければならない。そのためには情報の共有、方向性の共有、学生情報の共有を行うことが必要となる。本学の場合、サポート教員が図書館を随時訪問したり、LINEやメールなどを駆使して、速やかで密な情報共有を行っている。学生協働の取り組みでもっとも大切なことは、学生の活動を支援するという場面において、教職員が対等な立場で相談することにあると考えている。

ふみくら倶楽部のサポート教員を務めている岡野は、学生協働の特徴を以下の4点にまとめている¹⁾。

- ①大学図書館における学生協働は、学生が主役の活動であること。(誰と協働関係を結ぶのかは学生自身が決定する)
- ②学生協働の取り組みを効果的に進めるには、大学図書館という空間から解放する視点をもたな

ければならないこと。(いつ・どこで協働をするのかは学生自身が決定する)

③学生が大学図書館で得た学びの成果を、学外において応用する方法を探ること。(どのような協働をするのかは学生自身が決定する)

④学生自身が自らの学びとなる協働関係をデザインできるように、大学図書館職員や大学教員がそのための環境整備に動くこと。

これを読み解いてみれば、大学図書館でさまざまな活動を経て学び成長しなければ、学生が主体的な協働を実現することはできないといえる。これらの活動を通して成長するのは、学生だけではない。ふみくら倶楽部の直接の担当職員をはじめ、すべての図書館職員がさまざまな刺激を受け、学びの機会を得ることになる。また、図書館職員がふみくら倶楽部の活動に関わることで、学生たちの意見を直接に聞いたり、学生たちに相談する機会を得ることにもなる。

とはいえ、活動を長く続けていると、ときには相互依存の関係性に陥ってしまう可能性がある。また、図書館職員からの指示がないと学生たちが動けないというように、ある種の主従関係になってしまうことも懸念される。本学の学生協働においては、①自立した組織づくり、②密着しすぎない距離感、の2点を大切にしている。

4. 教員視点のふみくら倶楽部(岡野)

ふみくら倶楽部を設立するにあたり、事務的な面で中心となって動いたのは図書館職員の方々である。また、大学図書館内における日常業務については、基本的に図書館職員の方々の領分であり、教員の立場から関われる余地はほぼ見あたらない。そのため、教員としての関わり方は、学外活動における学生のサポートが中心となってくる。

これまで、「第1回全国学生協働サミット」(2016年)、「第3回全国学生協働サミット」(2018年)、「第4回全国学生協働サミット」(2019年)で、そのときの部長を任されている学生が登壇する機会をいただいたほか、東海地区の大学同士で毎年行われている「学生協働フェスタ in 東海」(2017~2019年)でも、本学の事例について紹介を続けている。その際、他大学の図書館職員さんから、「学外団体との協働活動をどのように実現しているのか」という質問を寄せられることが多かった。ふみくら倶楽部が

岡野はか：学生協働の取り組みは学生・職員・教員の間でどのように違って見えているのか

学外団体との関係を形づくってきた背景を説明するには、学生協働という取り組みを意識する以前における、教員(岡野)と学生たちとの活動まで遡る必要がある。以下、ふみくら倶楽部設立以前の経緯について、流れを追いながら振り返りたい。

4.1 ふみくら倶楽部の立ち上げ以前の学外活動

本学附属図書館ふみくら倶楽部の学生たちが、学外の人や団体と協働してきた取り組みには、たとえば、①伊勢河崎一箱古本市(2016~2019年)、②ウィキペディアタウン伊勢(2016年)、③伊勢うどんトークライブ(2016年)、④ブックピクニック(2018~2019年)、⑤出版社トークライブ(2019年)、などの活動がある。いずれの活動も学生協働ということを意識しながら学生主体で実施しているが、こういった学外活動の企画の多くは、図書館職員や教員からの提案によるものである。学生の参加協力を希望する学外団体からの依頼や提案が、サポート教員である私個人に寄せられたことに始まったものもある。この場合、届いた企画を図書館に伝えて図書館職員の間でも検討してもらい、その後の企画進行を学生たちに任せるという流れとなる。

こういった本を通じた学外活動が定番化していく背景にあるのは、個人的な関心からビブリオバトルの普及活動に私に関わるようになったことが遠因である。私は現在、縁あってビブリオバトル普及委員会²⁾の代表理事を務めている。2012年度のゼミでビブリオバトルを実施した際に、当時のゼミ生たちが強く興味を持ったことで、ビブロフィリアというサークルを立ち上げることになった。もともとこの団体は、附属図書館のラーニングコモンズを活動場所として、学生たちだけで小ぢんまりとビブリオバトルを楽しんでいたものである。ところが翌年以降、設立当初は考えていなかった学外でのイベント開催にも乗り出すことになった。具体的には、地元商店街との連携事業「ビブリオバトル@伊勢銀座新道商店街」(2013年)、三重県教育委員会に協力依頼された「高校生ビブリオバトル三重大会」(2013~2019年/2013年は立ち上げ年度のため伊勢志摩地域のみ)、津市の **kalasbooks** に協力依頼された「ホンツツキ」(2014年)、三重県総合博物館との連携事業「ビブリオバトル@MieMu」(2014年)などが実現に至っている。三重県の高校生大会の運営協力を除くと、いずれも継続的な取り組みには至らずに単年

度で終えてしまったものばかりだが、これらの活動に関わることで、本を介した学生と地域との交流の可能性に私自身が気づかされた。

もう一つのきっかけは、「伊勢河崎一箱古本市」の主催である。ふみくら倶楽部がこの活動に関わるようになったのは、2016年に実施した第2回目の開催からとなる。ふみくら倶楽部設立以前に行った2015年の第1回開催のメンバーは、私のゼミ生を中心に有志学生が集まって手探りで実施したものである。学生たちによる地域連携事業として、地元の「河崎商人市」というお祭りと協力しての開催となったわけだが、「第1回伊勢河崎一箱古本市」に関わった学生の一部は、その後のふみくら倶楽部の創設メンバーとも重なってくる。つまり、第1回の開催時は私のゼミ生として、第2回ではふみくら倶楽部のメンバーとして、「伊勢河崎一箱古本市」に2年連続で関わった学生が出てくることになる。現在の「伊勢河崎一箱古本市」は、ふみくら倶楽部による学外活動と明確に位置づけているが、当初から学生協働による地域連携事業という形を想定していたわけではない。毎年恒例の企画として事業を安定させるため、第1回のような有志学生の集まりという形態を見直し、第2回からは発足したばかりのふみくら倶楽部の正式な活動として実行主体を移し替えたという経緯がある。

ふみくら倶楽部が設立直後から学外活動することに特に違和感がなかったのは、①ビブリオバトルの普及活動による本を通じた学外活動(地域連携)の実践事例があったこと、②2015年の「第1回伊勢河崎一箱古本市」の実践から学外団体との協働実績ができていたこと、という二つがその背景にあったわけである。

4.2 ふみくら倶楽部の顧問として考えていること

ふみくら倶楽部の顧問の立場として、学生たちと関わる際には、以下のような点を意識している。

①新規企画の持ち込み

附属図書館の正式な事業として実施可能かを図書館職員と学生たちに相談し、協働可能かについて相互に検討すること。附属図書館の館内イベント(たとえばトークライブなど)とする場合の施設利用などの相談は当然だが、館外で行う学外活動であっても、図書館職員から学生へのアドバイスや活動支援などの業務が新たに発

生するため、通常業務に加えての対応がどこまで可能なかを相互に確認しなければならない。

②学外団体との連携の窓口

学外団体との窓口役となり、学生と学外団体との間に立つようにすること。学生たちを「無償で働いてもらえる労働力」と見てくる学外団体もあるため、場合によっては依頼を断るフィルターとしての役目を担っている。

③企画立案の肯定

学生からの新たな企画立案については、基本的にそのすべてを肯定的に受け止め、実現できる可能性を探ること。また、企画立案の相談をしやすい距離感を保つようにも心がけている。

④活動への信頼

学生たちの活動を信頼し、余計な口出しはせずに任せること。たとえばふみくら倶楽部の公式ツイッターやフェイスブックなどのウェブを活用した情報発信も、部長を中心とした学生たちにほぼお任せの状態となっている。判断に迷うことについては、その都度相互に確認をするようにしている。

実際の作業を進める上での注意点や詳細なやり取りについては、図書館職員の方々にご担当していただけのため、サポート教員の立場としては、できるだけ活動の大枠に関わることを意識している。

5. まとめ：学生協働を三者関係で考える(岡野)

以上の三者による視点をもとにして、学生協働の見え方の相違点について、本稿の結論を述べる。

学生たちは教職員と相談しながら、図書館の活性化事業に取り組んでいる。その際、学生たちの行動の模範となっているのは、教職員の存在も理由となるが、それ以上に先輩たちの存在を意識することも大きな要因になっていると考えられる。「全国学生協働サミット」で壇上に立ったり、図書館総合展でのポスター発表を行ったりすることなどは、過去に先輩がどのように行動していたのが指標として話題に出てきやすい。後輩学生たちは、先輩を意識しながら主に以下の二つの方向性を探っている。

①先輩たちの活動を継承し、ふみくら倶楽部らしさを形づくること。

②先輩たちがやらなかった(タイミング的にできなかった)ことに新たに取り組むこと。

大学図書館における学生協働の取り組みは、従来

は図書館職員に主導権があると見なされてきたが、学生協働の主役はあくまでも学生たちである。ただし、学生と図書館職員だけでは実現することが難しい活動もあるため、そこには教員も積極的に絡んでいかなければならないだろう。井上は図書館職員として学生との「密着しすぎない距離感」を意識していると述べているが、サポート教員としてはできるだけ学生との距離を詰めていくことを意識している。学生と図書館職員の関係と見られがちな学生協働の取り組みに、教員も積極的に関わっていくことで、複数の視点から活動を捉えるというメリットが生じる。活動の成果を相互に共有したり、活動の責任を相互に分散したりするなど、二者だけでは行き詰まるような活動も、三者が寄れば道が拓ける可能性がより高まってくる。

学生協働の取り組みがある程度広まってきた今日においては、「学生協働とは何をするのか」「学生協働を取り入れることで何ができるのか」という問いの立て方は既に過去のものになっている。学生協働という用語は、学生を中心に据えた人と人との協力関係を意味するが、それによって「学生が何をするのか」「学生に何ができるのか」と考えるだけではなく、「学生と何がしたいのか」まで視野を広げる時期になってきたと言える。

本稿の最後に、「第5回伊勢河崎一箱古本市」に出店して下さった、とある一般市民の方からのブログ記事を紹介したい³⁾。

伊勢河崎一箱古本市で忘れてはいけないうのが支えてくれている学生さん達である。荷物を出店ブースまで運んでくれ、お店を離れる時は代わりに店番までしてくれる。笑顔の絶えない学生さん達を見るのも楽しみのひとつかも知れない。私がもう手に入れることのできないきらきらが眩しい。

学生たちが持っている眩しさを、「きらきら」と表現し、それを年に一度の楽しみのひとつに挙げている。教員や図書館職員の立場でもこの思いは同じであり、わずか4年間しか時間を共にしない学生たちに「きらきらひかれ」とひそやかに願い、学生たちとどういった関係を築き合えるのかを問い続けている。学生協働というキーワードは、教職員自身が学生たちとの活動を楽しむための口実のようでもあ

岡野はか：学生協働の取り組みは学生・職員・教員の間でどのように違って見えているのか

り、教職員と学生が相互に学びあいを続けるためのきっかけとなるものである。

補記(岡野)

ふみくら倶楽部の部長は、2019年6月に岡村真衣さんへと代替わりした。その後、岡村さんを中心として、以下のような学外活動にも取り組んできた。

- ①「第5回伊勢河崎一箱古本市」の企画・運営(2019年10月27日)
- ②「ブックピクニック2019」の企画・運営(2019年11月2日)
- ③「第21回図書館総合展」でのポスター発表(2019年11月12～14日)
- ④「第4回全国学生協働サミット」における登壇と事例報告(2019年11月14日)
- ⑤「第105回全国図書館大会三重大会」第1分科会 公共図書館(2)におけるパネリスト登壇と事例報告(2019年11月22日)
- ⑥「学生協働フェスタ in 東海2019」でのポスター発表(2019年11月24日)

注

- 1) 岡野裕行「大学図書館における学生協働とは何か」『情報メディア研究』18(1), 2019, p. 29-40.
- 2) ビブリオバトル普及委員会『知的書評合戦ビブリオバトル公式サイト』2010-. <<http://www.bibliobattle.jp/>> [引用日: 2019-11-30]
- 3) えこ「伊勢河崎一箱古本市2019」『バンビのあくび』2019-10-28. <<http://bambi-eco1020.hatenablog.com/entry/2019/10/28/142335>> [引用日: 2019-11-30]

参考文献

- 1) 皇學館大学図書館サークル「ふみくら倶楽部」編『ウィキペディアタウン伊勢の記録』2017, 16p.
- 2) 皇學館大学図書館サークル「ふみくら倶楽部」編『伊勢河崎一箱古本市』2017, 32p.
- 3) 皇學館大学ふみくら倶楽部編『第3回伊勢河崎一箱古本市』2018, 16p.
- 4) 皇學館大学ふみくら倶楽部編『第4回伊勢河崎一箱古本市』2019, 16p.
- 5) 皇學館大学ふみくら倶楽部編『ブックピクニック2018の記録』2019, 16p.